

九九年九月十二日、午前十時二十三分、アメリカ合衆国のケネディ宇宙センターから、ぼくたちを垂せたスペースシャトル、エンデバーが、宇宙へ向かって打ち上げられた。シャトルは、ぐんぐんとすごいスピードで上っていく。そのときのスピードは、秒速約8キロメートル。音の二十五倍のスピードだ。発射四十分後、あっという間に、ぼくたちは地球から三億キロメートルのところまでやってきた。ぼくたちのシャトルは、この高さを保ちながら、地球の周りを時速三万キロメートルで回っ続ける。宇宙では、人間がうかぶこともできる。それは宇宙が、一無重力カーといって重さのない空間だからだ。宇宙では、重さだけでなく、上とか下とか右とか左とか、そんなことも関係なくなってしまう。君は、深い海やプールの中にもぐったことがあるだろう。無重力の世界は、そのときの感じと似ている。水にもぐると、体が水の中でふかっとうかぶ。そのとき、まるで体の重さがなくなってしまったような気がしなかっただろうが。そして、ときどき、上も下もなくなくなったような気がしなかっただろうか。無重力はふかふかと、とても気持ちいい。カを入れなくても、いろんなことが簡単にできる。でも、いつもういていると、ちょっとこまるときもある。そんなときのために、ゆかのおちこちにはベルトが付いている。それで体を留めて、うかばないようにするのだ。無重力の中にいると、ぼくたちの体にもおかしなことがいろいろある。例えば、地球にいるときよッ顔がふくらんで、反対に目は細くなってしまふ。どうしてだろう。それは体の下の方にあった体液が、無重力のために頭の中へうき上がってくるからだ。でも、だいじょうぶ。二かもすればなれてきて、ちゃんとふつうの顔にもどる。シャトルのまどから外をみた。地球だ。台風の雲がみえた。真ん中に丸くあながあいている。あそこが台風の間だ。あの雲の下に、どれだけの人や生き物たちがいるのだろう。宇宙からみる地球のままぎまな風景。いろんな形、いろんな模様。それをみていたぼくは、この地球の風景と、ぼくがけんび鏡でのぞいていた生き物の小さな細ぼうとが、とても似ていることに気がついた。そうなんだ。地球も生きていて一つの大きな生き物だったんだ。宇宙からみたとき、そのことがとてもよくわかった。宇宙に行っただのは、ぼくたち人間だけではない。コイやカエルやハチ、植物などのいろんな生き物もいっしょに宇宙へ行った。宇宙では、どんなことが起こるか、なぜそんなことが起こるのか、まだまだわからないことがたくさんある。これから、もっとたくさんの人や生き物が宇宙へ行くことができるように、いろんなことを調べたり実験したりしなくてはならない。ぼくが宇宙へ行ったのは、その実験をするためだ。